
偽物語

ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽物語

【Zコード】

Z04290

【作者名】

ゆづりや

【あらすじ】

人を見る目、がある女子高生、朝霧澪^{あさぎりみお}。平凡な日常を過ごしていた彼女は、学校の帰り道、突然何かの穴に落ちた。落ちた先の中世風の街中で何とか平凡に過ごしていた彼女に、次々と災難？が降りかかる。私は平凡に過ごしたいだけなのに！そんな女の子と、彼女を取り巻く王子様達のコメディ＆微シリアス物語。

この世界に来て、色々あつたけど、大切な人と出会って、愛する人
が出来て。

奇跡があるなら、きっと、私のこの日常が奇跡なんだね。

偽物語

にせものがたり

ふああ、と欠伸をする。眠い、眠いよすぐく。

季節は秋。食欲の秋だなあ、なんて考えながら帰宅の道につく。

私は朝靄濛。あさぎりもおごくごく普通の女子高生だ。

ごく普通と思っているのは私だけで、友達からは冷めている、とか
よくいわれる。

私はただ単に面倒事を避けているだけだ。

私は、昔から人の目を見ると大体相手がどんな人間だかわかる。

それは、特殊な能力などという物というわけではなく、ただの勘だ。幼稚園児の頃には格好良いお兄さんに声を掛けられたが、すぐに犯罪者だと分かった。

逆に、中学生のころは皆に嫌われている先生がいたが、目を見てち

やんと話してみれば気さくでいい人だと分かつたり。

そんな些細な事だけど、自分の子の目は結構気に入っている。

面倒な事を避けられるだけではなく、いい人を見つけられるって、かなりお得だと思う。

まあ、ただ人間観察が上手なだけだと思うんだけどね。

そんなこんなで、私は面倒事に巻き込まれる事も無く平凡な日を送っていた。
送っていたんだけど。

帰り道、それも普通の歩道橋で 落ちる って、どーいうわけ？

1・1（後書き）

はじめました、新連載。
王道の良世界トリップものです、。
ゆつたりまつたり更新していくと思こますので、どうぞ宜しくお
願いします。

「アサギリー、ちょっとこいつち来て、手伝つてー。」

「はーい、ただいま!」

こんにちば、澪です。

訳あって今、お店でバイトをしています。

お店でバイトといっても、此処はなんと異世界。俗に言つてトリップ
といつやつです。

……なんでこんな目に会わなきゃならないんだ。

そもそも、なんでこんな事になつてゐるかといつと、話は一ヶ月前
のあの夜に遡る。

帰り道、道端で真っ黒な穴に落ちた私。氣を失つて、気づいたら綺
麗な、森の中にいた。

原因は全く分からぬ。ただ、落ちた、という事だけが分かる事だ
った。

クローバーが敷き詰められたよつになつてゐるその場所で、私は眠
つていた。

何かに搖さぶらると思つたら、そこには40歳ぐらいの女人がいた。

彼女はマルサ・ティデリーさん。

異世界に来て倒れていた私を見つけてくれた命の恩人だ。

混乱している私を落ち着かせてくれて、街まで連れてきてくれた。彼女は旦那さんと一緒にお店を経営しているらしい。なかなかおいしこうして評判のお店らしいよ。うん。

で、事情を説明しても分かつてももらえないと思つた私は記憶喪失を言う事にした。その方が都合が良いから。

そうしたら、なんとマルサさんは私をお店で雇つてくれると言つた。何でも、娘さんと同じ年頃の私を見捨てておけないと。私にとつてもとつても助かる提案だったのありがとうございました。受けた。

そんなわけで、私はこのお店で住み込みアルバイトすることになった。

ただ、なあ…。

この私の落ちてきた世界は、私の居た世界で言つとヨーロッパあたりの中世風だ。

外人さんだよ、外人さん。みんな体格が良くて160センチの私が小さく見える。

成人男性、普通に2メートル以上が当たり前だからなあ…。女人でも大人なら180センチはある。

高校一年生、16歳だと言つたら、皆に疑われた。

この世界では13歳ぐらいだつてよ。けつ！中学生に見られているとは、なんか屈辱…。

ただ、私の居た世界と違うのは一つ。

髪や目の色が多種多様なんだ。金髪はもちろんのこと、赤、青、緑、銀、…。これぐらいだつただらうか。

国ごとに色が違つらしい。何だ、私はあまり社会の勉強は苦手だから、あんまりよく分からなければ…。

此処はハルアヴォルト帝国。属国を六つ従えてる、大陸でも一、二位を争う大国らしい。

ちなみに、マルサさんはアスフェイアという国出身らしい。

金髪碧眼が主な容姿で、マルサさんはその特徴をそのまま受け継いだかのように金髪碧眼の美人さんである。

食べ物が美味しい国だそうで、だからお店を開きに王都まで出てきたらしい。

六つの国も、均衡がとれていてハルアヴォルト帝国は今は平和らしい。水面下では色々あるらしいけど。

私のいる場所は、いわゆるハルアヴォルト王都という場所で、属国の人たちも色々集まつてくる賑やかな都だ。

そのため、色々な髪の色、風流、国民性、とにかく色々な人がいる。

そんな場所で、私はアルバイトをしているわけですが。

いやあ、言葉が通じて本当に良かつた。何でも、帝国の共通語が日本語らしい。

読みは全く分からないけど。英語がミミズになつたような文字、。今練習中です。

13歳のマルサさんの娘さん、ミリア・ティデリーちゃんが教えてくれる。年下に教えてもらうつて、ちょっと恥だが仕方ない。

まあ、そんなこんなで、私は何とかこの世界で暮らしていきます。

「アサギリちゃん、アップルパイとアフタヌーンティーを宜しくお願
い。」

「アサギリちゃん、俺は口替わりランチ！」

「はいはい、ただいまー！」

お店は朝から忙しい。結構繁盛しているので、お密さんがたくさん来る。

私はお店でまあ、私の世界で言つ注文係とか、運ぶ係とか、レジみたいな所謂雑用をしている。

特に忙しいのがお昼と夕方。忙しいつたらありやしない。まあ、お世話になつてゐるみだから繁盛してくれるのは嬉しいんだけどね？一ヶ月もすれば仕事に慣れて、常連さんには顔も覚えられて「アサギリちゃん」と言われている。

身長と日本人独特の童顔のせいだろう、子供扱いされているような気がして仕方がないのだが。

まあ、御褒美といって甘いものくれたりするお密さんもいるからいいんだけどね！甘いものは美味しいし。

この世界の主食はパン。勿論お米は無い。一ヶ月もするとお米や味噌が恋しくなるのだが、我儘は言つてられない。

お店の厨房を深夜借りて色々な日本料理を作つてみたりするのだけれど、……、料理ぐらいできますよ、これでも伊達に一人暮らしやってたわけじゃないんだから！

私がトリップしたときに持つっていたカバンの中に図書室から借りた料理の本が山ほど入つていたのが助かった。

マンネリ化した我が家の食卓を改善するべく借りた本が、こんな場所で役に立つとは…。

ちなみに、学校帰りだった私のカバンの中には、勉強道具、山ほどあるお菓子、眼鏡、本、化粧道具、演劇用のウイッグが入つていて。黒髪はこの世界に珍しいらしい。というか、居ない。だから、私が異世界に落ちた時に偶然に一緒に持つて来たかばんのなかに入っていた演劇用のウイッグを被つて生活している。

使い辛いが、仕方ない。おかげで私は今金髪だ。

マルサさんだけには黒髪を見られたが、記憶喪失という事で何も知らないをつき通した。

優しい人なので、深くは突っ込まないでくれたけど。

お菓子はこちらでは貴重なガムなどが入っていたため、ちまちま口がさみしことに食べている。

幸い、買い物のためにおいたところだつたから山ほどある。ふつふつ。

「アサギリ、最近どうもひの場所には慣れた?」

「はい、マルサさん。もう仕事にも慣れましたし、順調です。」

「あんたみたいな子供に仕事をさせて悪いねえ、本当なら何もせず普通に過ぐしていくてもいいんだけど……。」

「あはは……、私もうーんですし。何もしないのは悪いですし、住み込みさせて頑張っているだけで有難いですから。」

相変わらず私の事を子供だと思つてゐるマルサさんに苦笑する。
まあいいんだけどね、優しくしてもらえるのは良い事だしー。

「やつこやあ、もうすぐこの辺で式典が開催されるから、店舗へ
来るだろ?けど頑張ってね。」

「式典？」

「その辺で聞かなかつたかい？シルヴァニアのお姫様がハルアヴォルトの第三皇子と婚約するのさ。」

「第三皇子、ですか？」

「ああ、レヴィル殿下だね。美男美女でそりゃあもつ街は大騒ぎだよ。」

「うなんですか。」

「ああ、田の保養になるよ。レヴィル殿下は。」

「にっこりと笑みを浮かべてマルサさんが言つ。そりや、なんだか街が賑わいでいるのもうなづけた。

「母さんはレヴィル殿下ばっかり贔屓して。シユベルツ殿下の方が格好良いじゃん！」

お、なんだ、ミリアちゃんも参戦か？

「何を言つてるんだい、レヴィル殿下の方が可愛いじゃないかい、」

「シユベルツ殿下の方がかっこいいー！」

やっぱり女の子は恋バナが好きだな。マルサさん、田那さんはどうしたんですか。

「レヴィル殿下とシユベルツ殿下ってどんな方なんですか？」

素朴な疑問をぶつけてみた。

「レヴィル殿下は今も言った通り第三皇子でね、現皇帝陛下の『兄弟さ。確かに今年で23歳になるんだ』たかな。そりやあもう見事な銀髪を持つた美男さんでねえ。灰色の瞳に肩に届くぐらいの髪の長さでとんでもない秀才さ。武術にもたけていて誠実なまさに皇子様といつた感じのお人や。」

「それでね、シユベルツ殿下は第一皇子様で確か今年で29歳になられるはず！それはもう美しい金髪に透き通った湖のような青い瞳は吸い込まれそうなのだと貴族の女性の中では評判だそうよ！現帝王陛下の右腕とされる方で、もうそのお仕事の出来のよさつといつたら、天才といつてもいいほどだわ！」

……、うん、とりあえず、一人の勢いがすごい。

まああれだ、何となくすつ『』い皇子だつてことは分かつた。

まあ、私には関係の無い人たちだらう。平凡な日常を送る私にどうては。

「ねえねえ、式典、一緒に見に行こうよ、アサギリー！」

「そうだね、少しごらいなら抜けてもいいから、見に行つておいでよ。」

「はあ、わかりました。」

気の抜けた声で返事をする。あんまり興味無いんだけどなあ。
ま、出店とかあるかもしけないし、見に行くのもいいだろ？お菓子食べたい。

そんな気軽な事を考えていたが、私の日常は、この日から少しずつ崩れていいくことになる。

運命とか、私はそんな言葉信じてはいないけど、
運命の歯車なんものが本当にあったなら、それはほとんどいやいや
しく厄介な物でしかないのだろう。

式典を明日に控えた今日、私は明日のための食材を買いに街に出た。もう此処に来て一ヶ月半ぐらいは過ぎていて、街の道とか、裏道は覚えた。

悪ガキ達に教えてもらつた秘密の裏道なんとかも知つていて、いつのまきつといつか役に立つ。ふふふ。

「えーっと、後はキシユカの実だけだな。」

メモを見ながらヨーロッパ風の街並みを歩いている。
街は綺麗だし、活気もあって私は結構気に入っている。
このままこの街でゆつたりと暮らしながら、
もとの世界に帰れる手がかりを見つけられればいいな、なんて考えていた。

そんなとき、ふと後ろから衝撃が走った。

誰かにぶつかられたみたいだ。

ぶらぶらと歩いていただけだから、急な衝撃に備えなんてあるわけもなく私は転んでしまった。

抱えていたパンやら色々な物を道にぶちまけてしまった。

いたた…。顔をあげたら、そこにはマントを着てフードをかぶつている背の高い男に人がいた。

相手はこちらを振り返つたが、すぐに踵を返していつてしまおうとした。

誰かから逃げているように急いでいるようだけど……。

正直、ぶつかった女の子を置いていくつて、どうよ？

私は、そこらじゅうに転がった買った食材の中で、一番堅そうなジャガイモみたいな、グスカといつ、手の平サイズの丸い食べ物を手に取った。

立ち上がり、そして大きくのけぞれば、野球のピッチャーの如くグスカを走り去る奴目がけてぶん投げた。

グスカは相手の頭に直撃。奴は前向きに倒れるようにして蹲り、頭を押さえていた。

ははん！伊達に男子に交じつて野球やつてた私じゃないんだよ！魔球の恐ろしさ見たか！

相手に近づき、隣までやつてくれば、うずくまる相手を見下ろし私は言つてやつた。

「何を急がれてるのかは知りませんが、人にぶつかったら謝るだの

助けるだのする事はあるでしょう。いい年した大人が恥知らずな事をするものではないですよ。」

「言つてやつた、言つてやつたぞ！
でもやばい、これで怖い人だつたら私どーしょー、やべ、計算に入
れてなかつた。
どうしょー！」

相手は立ち上がりれば、私の方を一瞥した後、ペニワリと頭を下げた。

「すまない。追わっていたものだから。」

「……あ、この人いい人だ。
なんだか、あんなものぶつけちゃつて罪悪感がむくむくとわきあが
つてくる。」

「あ、あの、いえ、お気になさう。私こそ申し訳ありませんでした。
た。」

一応頭を下げる。

そうすると、相手の人はキヨトンとした後、無表情なその顔を少し
だけ綻ばせた。

「ああ、確かにあれは痛かつた。」

ううう、ごめんなさい、

しかし、じつ見えてみると、相手のまどかているものが上質だ。
……あるえ、やつぱい、ひょつとして貴族さまがお忍びでやつても
た、とかだったのだろうか。

まあ、いい人っぽしきにないでおこう。

「すまない、遅れて参るので一禮して失礼する。」

「えっ、追われているって、どういう意味ですか？」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

突然、大きな音がした。

「チツ、もう来たか。」

「え、え、え、なに！？」

非日常が、やつてきました。

ガラガラと瓦礫が崩れる音がする。もくもくと砂埃が立っている。
その様子を茫然と見つめる。
え、た、大砲でも打たれたんですか？

「みーつーけーたーぜえ……？……逃げんじやねえよ。」

砂埃が収まつて、一つの影が見える。

これまた身長の高い、赤い長髪を一つまとめてくくつていの野性的な男性。

ちなみに、私の隣に立つている人は茶髪だ。

茶髪といつても、日本人が染めた感じじゃなく、地毛なのだらうカラサラとしていて綺麗だ。

と、そんな事はどうでもよくて。

まさか、まさかだけじね?」の瓦礫を拳で壊したなんて事……無い、よね?

思わず後ずさりする。
危険だ。逃げなきや。

やつ思つたとたん、茶髪の人腕をひかれ抱きあげられる。

なになにー？

「走るぞ。口を開くな。舌をかむ。」

えええええええ、！？ちよ、ま、つー

それから、茶髪さんは物凄い勢いで走りだした。
オリンピック選手顔負けの速さで、だ。

いろんな町の角を曲がったり潜つたりと、粗手を巻くよいつて道を選
ぶ。

「待ちやがれーっ！」

といつ声とともに赤毛の彼が追いかけてくる音がある。
茶髪さんが苦しそうな表情を浮かべていたので、私を抱えてはきつ
いのでは、と思つた。

「そこ」の角、一右に曲がつて！」

咄嗟に私はそう叫ぶ。

街を何度も行つたり来たりしているのだ。構図は覚えている。茶髪さんは私の言つとおりに動いてくれた。

「そこ」を左に！次はまつすぐ、右叫んで、右を曲がつて、そこ潜つて、！」

アーチになつている林のようなところに出たところで、いつたん捲けたのだろう、私を下してくれた。

「厄介事に巻き込んで済まない。君は此処から帰りなさい。」

「あ、はい、分かりました……。」

「では、。」

そつとひいて、茶髪さんは華麗に去つていいく。

いつたい、今田は何の厄田だ？

そもそも、いつたい彼らは何者なんだ？

来ている服装や、品がよれそなところから指摘族には間違いない、
と思う。

なんて事に巻き込まれたんだろう私。

ただ、平凡に過ぐしたいだけなのに。

そこで、はた、と氣づく。

見つた物ぶらまけて帰つてやがったー。
あーもー、じーすっやーー。

踏んだり蹴つたりな一日が終わった。
でも、これは私の災難の始まりにすぎない。

昨日はひどい目にあつた。
もう、あんな事はご免こうむりたい。

茶色の髪を持った、あの男性はいい人っぽかったけど貴族らしさがあつたから嫌だし。

赤い髪を持った、あの男性は肉食獣のようで鋭い目をしていた。思い出すだけでぞつとする。

買い物しなおして帰つて事情を説明したり、「災難だつたねえ、」つてマルサさんが言つてくれた。
全くだ！

あ、余談だが、買い物したものの中には、私が料理するものも入つているのだ。

私がこそそとつくなつていった日本料理を、マルサさん達が食べておいしいと言つてくれた。

それだけで嬉しかったのに、お店の料理にじよつとままで言つてくれたのだ。わお！

厨房の人たちに色々な料理を教えてあげている。これが結構楽しい。

こんな風に、楽しい時間が過ぎていく事は良い事だと思つ。明日の式典も、楽しければいいんだけど。

まあ、そんなわけで、今日は朝早くから式典といつ事で朝食を食べにくるお密さんが多い。

いろんなところから来てる人がいるので髪の毛も色々な色がいつも

よりいて、見てて面白い。

でも、目、を見ながら喋っていると、善人ばかりじゃないようで気がつけなくては、なんて思つてゐる。

とこゝが、午前中に行われる予定だった式典は、午後に変更されたらしい。

何か不備でもあつたのだろうか？まあ、知つたこゝぢやないけど。

で、ここで問題。といふか、やばい予感がする。

開店した以来から今まで、あ、今いつてこののは私の呪た世界で書つ

10時じうなんだけど。

ずーっと、隣に腰座つてこるお客やんがこる。

そのお客やんが、どーも昨日の輩と同じようなこがかる。

腰すむに、貴族っぽこいつだ。

あーあー、なんでこんな場所にいるんだお貴族さまが。
とつあえず、問題を起しえなこよひ。なるべく関わらなこよひ。

そんな事を考えながら、その危険人物へと注文を取りに行つた。

「（注文は？）

「キシユカのパイとハルヴァのパフェ、グラウンティー。」

「……キシユカのパイとハルヴァのパフェとグラウンティー、以上で宜しかつたでしょうか？」

「ああ。」

甘いもんばかり。甘党なんですね、お兄さん。

すっぽりとかぶったマントからこぼれ出ている、肩に届くぐらいの銀髪が美しい人だ。

先ほど注文を承つた時に見たが、綺麗な灰色の目をしていた。

全く、貴族には美形が多いのだろうか。庶民の女の子が騒ぐわけだ。

注文をマルサさんに伝えて、出来上がったものをコアが運んで行
こつとしているところだった。

さすがに二品はまだ重いのだろうか、ちょっと手元がふりふりとし
ている。

…おこおこ、危ないぞ？お客様にぶちまけてくれるなよ？

嫌な予感がする。大抵このひとも予感が当たるんだ。

ふらついたコアちゃんは、床のきしんでいるところに躊躇って転ん
でしまった。

放りだされたキッシュカのパイとハルヴァのパフとカラウンティー

は吸い込まれるまゝに銀髪のね尻を逆回りに落としてく。

ガシャーン、ーとこいつ瓶と共に、トーターたちがあの銀髪のね尻を
んに降りかかる。

ミコトちゃんは真っ青になつておりおひどいところ。

……………せいかつたよ、おー。

『デザートの汁やホイップクリームでぐちゅぐちゅな貴族さま（仮）。

怒りのオーラが目に見えるほど怒って、ミコアは真っ青。

「ああ、私はどうすればいい？」

「お客様、大変申し訳ありませんでした。お召し物をお変えになりますか？」

そう言って、間に入つた。ああなんで私こんなことしてるの？
面倒事は避けて通るたちじやなかつたのか私。

怒りの矛先は私に向けられた。

ひいひいひい！美形が怒ると迫力あるひいひいひー。

でも、目を見れば、悪い人じゃないってわかる。

少し安心。自分の目を信じて、喋ればいいと思つ。……たぶん。

「此處の店員は品を客にぶちまけるものなの？ そうだとしたら、この店は最悪だな。こんな店に客が来ていること自体おかしいと俺は考えるわけだが。大体、こんな餓鬼を使つているなんて、ろくなことにならないと分からぬものか。全く、下界に降りてみればとんだ災難にあつたものだ。」

……前言撤回。こいつ最低人間だ。

や、普通さ、此処までは言わないでしょ？ムカついててもさ。

下界とか言ってるあたり、お貴族さまとかそういう偉い人には間違いないらしい。

でも、私はそんな事は気にならなかつた。

ただ、大好きな人の店の事貶をされたといつことが許せなかつた。

いつたん相手に踵を返して店の外に出る。
相手はキヨトンとしているが知つたこつちやない。

私は井戸から水を素早く汲んできた。
そして、また銀髪の彼の所までやつてきて、

思いつたり頭から水をぶっかけた。

「お姫様。これで綺麗になりましたし、ついでに頭も冷えたでしょ
うか？」

田の前には怒り狂つて絶対零度の雰囲気を醸し出している相手。
ああ、この先どうなる？

うわ、怒ってる怒ってる。
綺麗なお顔が歪んでますよー、怒りで。

だが、私も怒っているからおあいこだ。

お店の事をあんな風に言つなんて、この男許せない。

銀髪さんの手が振り上げられる。

あ、やばい。

私はこの世界の人たちと比べると、力が弱い。

それなのに、成人男性の相手に殴られたら、骨の一本でも折れるだ
るう。

目をつむって、次の衝撃に備えた。

が、ここで予想外の事が起きた。

第三者の乱入だ。

銀髪さんの腕を掴んで私を助けてくれたのは、見事な波打つ金髪が美しい、透き通った蒼い瞳をした人だった。

マントをかぶつて顔を隠しているようだつたけど、近くにいた私は見えた。

この人の目は、悪い人の目ではない。ただ、とても

「兄上、！」

「お前は、こんなところで何をしている？」

「……兄上には関係ない！」

「関係あるんだね。今田せば典だとこいつ、すり抜かして向こう
んな場所にいる。」

あるべ。なーんか、アリバサゲで会話を聞こえてくるよいつなんです
けど。

「…元々、私は「」んな」とに反対だったのだ…」

「それが務めなのだからない。私達皇族…」「あのー。」

思い切って声を掛けた。

「の人たちは、私の勘違いじゃなければ

「それ以上言つたら、ばれてしまつと思こますよ? 大変なことにな
るんじやないですか?」

二人とも、ハツとした顔をした。

ああ、こりや、ビンゴだ。

皇族の、レヴィル殿下とシュベルツ殿下がなんでこんなにいろいろ？

「どうあえず、戻るぞ。」

あー、やばいやばいやばいやばい。
なんで皇族の人なんかがこんな一般市民の店にいるんだ。

「……。」

レヴィル殿下は無言だったが、一応は領きシユベルツ殿下の言葉に従つらしい。

あ、帰るんだ、一・よかつたー。

「君。」

あれ？

「はい、何でじょうか？」

「すまないが、ついてきてもらひや。」

……………

まあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあ

65

「いえ、あの、私は……」

「悪いが、拒否権は無い。私たちが何者かはもう気が付いているだろ
う。」

シユベルツ殿下が無情にそう言ひつ。

皇族にそう言われては、しょせん庶民の私はどうとも言えなくて。
絶対命令には、従わなくちゃいけない。

！畜生！皇子様も性格悪すぎるだろ！

でも、仕方がないから「わかりました。」と言つてついていく。
マルサさんに近づいていき、

「すみません。ちょっと用事が出来たので今田はお店にいらっしゃりません」

「は？ ちょっと、向こうにいる感じで……。」

マルサさんは私の後ろにいるマントをかぶつた一人を見て押し黙る。こういう事には敏い人だから、何か厄介事に巻き込まれた事に気づいてくれたのだろう。

心配そうな視線を向けられる。

私は、にっこりと笑みを浮かべた。

「大丈夫です。必ず、帰ってきますから。」

マルサさんは、その言葉に安心したのだろうか「行っておいで。」
と言つてくれた。

…… もあ、この先どうなる私？

さて、今私は皇族様の秘密を知つた事になる。
レビュール殿下がご婚約の式典を逃げていた、という秘密を。
そして、平民である私がその事を耳にしてしまいました。
さあ、私はどうなる？

- 1、何事も無く家に帰れる。
- 2、言わないように頼まれる。
- 3、口封じに殺される。

まあ、普通にいつやって馬車に乗つて連行されてるからして1は無いだろ？

2も、皇族の方々が平民にお願い事なんてありえない。

となると、3なんだけれども。

死にたくない。どうしたらいいだろ？

そんなこんなでやつてきました、お城に。

いろんな離宮がたくさんある中の、奥の方の一つの屋敷に招かれた。

奥の方に行くほどやばいって、誰かに聞いたことがあるぞ！
やっぱい私、本当に帰れるのか？

マルサさんにつづりにいらっしゃったかも。『めんなさい。

従者的人は部屋の外で待機している。

部屋の中にはメイドさんが五人と、レヴィル殿下とシユベルツ殿下

と私だけ。

メイドさんは部屋の端の方にいる。

真ん中のテーブルに一人が腰かけた。

私はどうすればいいのかと迷っていたら、

「君も座つてくれたまえ。」

なんてショベルツ殿下が言つ。

…無茶言つなよ。

皇族の人たちと同じテーブルに着けるわけがないだろ？。

でも、言われた事にそむくと命令無視で首をはねられかねないので、大人しく座つておいた。

緊張するつうつうつう…！－誰か助けてえええええ－！

「レヴィル、午後にまた正式に式典をする。それに出席するよう。」

「

ショベルツ殿下がそう口を開く。

「嫌でさ

レビュール殿下がそう即答すると同時に、シユベルツ殿下の拳が飛んだ。

文字通り、レビュール殿下が吹っ飛んだ。

ひいいいいいいい！……どんだけ力あるんですシユベルツ殿下！

武術にひでてるひレベルじゃなしそこれ！

「いつまでも駄々をこねて居る氣か、愚か者が。皇族としての務めを果たせ。」

冷たい子でシユベルツ殿下がそう言い放つ。

レビュール殿下もそれには黙りこんで、むくりと起き上がりればまた腰かけて「申し訳ありませんでした、」と小さな声で言つ。あの拳をくらつて平氣な顔をしてるつて、どんだけ丈夫なんだ。

この一人、怪物だ。

「さて、と。本題に入るが……。」

キ、タ。

シュベルツ殿下が笑顔で私の方を向く。
無言でレビュール殿下の目が向けられた。

怪物相手に、私はどうすればいいのだろう？

二人の視線が痛い。
どうしたらしいのだろうか。

考えた結果、私はいい子ちゃんぶる事にした。
うん、これぐらいしかできないもん。

「あ、あの、私誰にも聞こませんから… ハー。」

あわてた感じにハサウヘ。

おお、私って役者だ。

「レヴィル殿トガ」婚約の式典をすっぽかしたなんて、そんなこと誰にも言こません…！」

黙。

お~おい、なんか反応してくれよ。

冷や汗がたらりと體中を流れる。

嗚呼、緊張で死にそうだ。

少しした後、先ほどと全く変わらない笑みを浮かべているショベルツ殿下が口を開いた。

「君には、緘口令を敷かせてもらひ。」

「緘口令、ですか？」

「ああ、この愚弟のやうかした事を、誰にも言つがない。もしも破つた暁には不敬罪として罰せられるからそのつもりで。」

ぐ、愚弟って…。

容赦ないですなシユベルツ殿下。

ほら、レヴィル殿下もむつむつしゃべりましたよ、バーヴィスさんですか！

「りょ、了解いたしました。」

「ならいい。物わかりのいい子は好きだよ。」

ヒツヒツと笑みを浮かべてしゃべる。

……普通の女の子だつたらキャラーッとか言ひでしょうがね。

私には胡散臭く見えて仕方ないんですよ。

でも、引きつる顔で一応笑みを浮かべておく。

その笑みを見てレヴィル殿下は物珍しそうな、シユベルツ殿下は小さく眉をひそめられた。

「やつべー、！表情まではコントロールできなかつた、！」

「よ、用件は以上でしょつか？」

狂い紛れにそういう、もう早く帰りたいよう一

「あ？ああ、そうだな。レヴィル、馬車の手配を。」

「了解いたしました。」

あ。何だかんだで帰れそ、よかつたー！

さて、私朝霧澪、帰つて参りました。
無駄に豪華な馬車に送られて、見事このお店に戻つてきましたとも！

帰つてきたら、マルサさんの熱い抱擁を受けた。おおう、ひょっ

と痛いけど、嬉しい！

「アサギijo…あなた、よく無事で帰ってきたね！」

「おかげさまで…何とか無事に帰つていれました。」

にこりと、相手を落ち着けようと笑みを浮かべる。

マルサさんも、その笑みに安心したのだろうか力を抜いてくれた。
人の優しさを感じるのはこういう時だ、マルサさんの目を見ても、
本当に心配してくれた事が分かる。

それから平凡が続いた。

マルサさんのお店で、お客様とも仲良くやりながら何とかやつて
いた。

今日は買い出しを頼まれたので買い出しに行つてきた。

そのついでに、この間、といつてもすいぶん前だけど、見つけた私の秘密の場所に行くことにした。

家々が並ぶ道の上の方の、瓦礫を潜つた奥にある、この街、国を見渡せるすこくいい場所だ。

細い道を行くと広く一面に広がる芝生。ふわふわとした此処で寝転がっていると、自然といい気分になつてくるんだ。

不意に、カサ、と音がした。何だらう、と思つて顔をあげたら、そこには

いつだかに見た、フードを被つた男性がいた。

今日も前のよつこフードを被つていて、わらわらとした茶色の髪は隠れている。

個人的には、こんなにきれいな茶髪、日本では挿めなかつたからフードを外してしまえばいいのと思つ。綺麗だから。

お互ひ、視線があつて、しばらく無言になつた後、

「あー……、こんこむは、？」

結局、私の口から出たのはそんな言葉だけだった。

1
-
1
3

相手は貴族かもしれないから、慎重にいかなくちゃいけない。

万が一無礼なことをしちゃったら、私死刑。その場で切り捨てられて人生end。

それだけならまあいい方だけど、（いや悪いけど…）悪ければ連帯責任で店にまで迷惑がかかる。

それだけは何とか回避しなきゃいけない。

でも、なぜだろ？。

この人の、ちらりと見えた琥珀色の瞳。

とっても澄んでいて綺麗で、どうしてか悪い人には思えないんだ

「君とは、奇妙な縁があるようだ。」
くす、と柔らかな笑みを浮かべて、茶髪さんはそう言った。
くつそう、美形って微笑むだけでときめかれるから、絶対得してるな。
そんな捻くれた事を考えながら、ときめいていいる胸を静めつつ次に
なんて言おうかとぐるぐると考えていた。

そんな事を考えていたら、あちらから声をかけてくれた。

「以前は本当に申し訳なかつた。怪我はなかつたか？」

「あ、いえ、大丈夫です。ただ、途にぶちまけちゃつた材料代がもつたいなかつたといいますか…。」

「つて、何言つてんの私！」

「こんな事言つたら相手の人罪悪感感じちゃうじやないか！」

「ああ…、本当にすまない。大分前の事だが、説びさせてほしい。
…これで足りるか？」

「ああああああやつぱり！罪悪感感じちゃつてる…し、しかもお金払おうとしてるし…つて…」

「む、無理無理無理無理無理無理…無理です…」こんなに頂けません

私が、この世界に来て一番初めにならったのは、お金の事。

まあ、結構簡単で。

銅貨。銀貨。金貨。この三つで成り立っている。後はお札?みたいなもの。

お札みたいなものは10マーテル。(マーテルとは帝国共通のお金の考え方だ。)

銅貨は100マーテル。

銀貨は1000マーテル。

金貨は……何マーテルだったか覚えてない。それぐらい高価な物だつてことだけ覚えてる。マルサさんも覚えなくていいって言ってたし。

庶民は銅貨をじゅりじゅりと持っていて、大抵はそれで会計を済ませてしまう。

たまに銀貨があると、たくさん銅貨でお釣りを出さなきゃだから面倒。

でも、銀貨なんて滅多に見ないからそんな面倒な事もしなくていい。

そして、金貨なんでものよ、滅多に…いや、庶民なり現なくて一生終える事もあるつて言つてた。

その、金貨を。

ふ、袋一杯に、じゅりじゅり。

儲(と)けもなく、差し出しあがつた！

「…いいい、これ日本のお金にしたからへりへりになんだから…いいい

1・13（後書き）

久しぶりの更新になってしまい申し訳ありません！
半年以上更新してなかつたつてどんだけ放置してたんでしょう私…！
これからは最低一ヶ月に一回は更新していきますので、ほかの作品
も！
では、失礼致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0429o/>

偽物語

2011年7月18日12時58分発行